紹介

古代傳承研究

肥後和男著

曩に「日本神話研究」一編を著はしてわが國古代の神話解釋の上に新に歴史的＝民俗學的方法を確立された東京文理科大學肥後和男氏は此度更に右の姉妹編として「古代傳承研究」を著はされた。前著は氏の日本神話に關する諸論考を編輯せるものなるに對し、これは專ら素盞嗚尊の神話の研究に宛てられてゐる。氏の素尊に關する所見は既に前著に於いても諸所に示されたところであつてその要は尊の本性を以て山の神にありとし、大蛇退治の物語を以て一の農業神話と解しようとするにあつたのであるが、此度の新著に於いてもかくの如き基本的解釋はこれをそのまゝ維持しつゝ然も單にそれだけの一面的解釋に終らずそれが如何にして現在見るが如き複雜なる物語になつたかを、物語の筋の逐條的分析によつて明らかにしようとされてゐる。即ちまづ素尊の名義から始めてその誕生、天眞名井に於ける誓約、その荒暴と高天原追放、大蛇退治、稲田姫との結婚等尊を中心とする諸種の物語に就いて、それが本來わが國の國家的統一以前、各部落々々(出雲はその代表名であるところの)に於いて、季節的な農業神事を通じてその部落の、或はその豪族の、歴史として傳承せられてゐた蛇身の山の神の物語が、大和朝廷による國家の統一が完成するにつれて次第に朝廷を中心とする神話の中に取入れられその立場から語られるやうになつたことを明らかにされてゐる。素尊の神話、或は廣く所謂出雲神話なるものゝ構成をかやうにわが國家成立の歴史、古代社會の發展の經過に關係づけて解釋しようとする試みは必ずしも敢へて著者によつて始めてなされたものといふことは出來ないけれども、然も著者の古代史に關する知見の廣さはわが國家成立の歴史を以て單に所謂出雲民族と天孫民族との間に於ける政治的權力の消長といふが如き平易な一面觀にとらはれず、或は古代に於ける國なる觀念の内容を論じその神祭の形式を考へ、或は古代に於ける水稲の傳來を推測しその土地制度を論議し、更には古代社會の階級的構造とその政治的統一の意味を明らかにする等、實にあらゆる方面から之を問題とし、その間に於いて神話的傳承の成立し且維持された意味を說いてゐるのであつて、かくの如きは實に著者に於いてのみよくなしうるところであらう。

殊に筆者がこの書に就いて感ずることは日本の神話に關する古來の諸研究がよくその中に取り入れられてゐることであつて、本居以來儒佛の附會、とるに足らぬものとして斥けられて來たところの中世神道家達の著書までも新しく見直され、意味づけられて、神話を以つて過去の歴史的事實であるよりも、現在及び未來の行爲的規範であるとする著者の主張を支持してゐる點である。惟ふに素盞嗚尊はわが古代傳承の中に於ける最大の神話の一としてそ

の神話は古くより幾多の研究者をもち、殊に明治以來神話研究の進歩によつて最も多く論ぜられたところであるが、然も眞に國史全體に對する深き洞察と文化一般に就いての博き理解をもつた研究は極めて稀であつた。正しき國學の傳統を承けつゝ然も獨自の創見に富む本書の如きは正しくこの方面の研究に一新紀元を開くものといふべきであらう。この書が日佛社會學研究叢書の一編として簡單ながら佛文の概要を附載してゐることもかゝる研究がやがて世界的な學問水準に於いて正しく評價されるに至るべきことを豫約するものと思ふ。(菊判三六八頁、口繪一枚、佛文概要八頁、昭和十三年九月、東京河出書房發行、定價三・五〇)(柴田實)

土地及び聚落史上の諸問題

牧野信之助著

「武家時代社會の研究」に次ぐ牧野信之助氏の論文集である。氏の前著には「土地制度及び聚落問題」の一篇があるが、此著は其後更に氏が同種の問題に心を潛めて研鑽を積まれる事十年間、倦まざる努力の結果を聚成せられたものである。

收むる所は「莊園に於ける請負」以下十二篇、いづれも嘗つて史學雜誌其他に發表せられ學界の注目を集めたものであるから、一々の内容については此處に改つて紹介するまでもないであらう。

卷頭に載せられた、「莊園に於ける請負」の如きは、僅かに八代國治氏の研究があるのみであつた此問題を、かく迄體系づけられた氏の苦心は思ふべきである。勿論、最近では、社會經濟史學(五ノ十一)上に「請所の研究」なる舟越康壽氏の研究も發表せられるに至つたが、牧野氏は早くより此問題を注目せられ、其一部は「莊園制の崩壞」や河口坪江莊の研究にも示され、大學の講義に於ても之を說かれて、我々を啓發せられたのである。

「中世末、寺内町の發達」「散居制と環濠部落」其他の一連の聚落史に關する論文は、嘗つて、小川琢治博士が初めて投げかけられ學界の注目をひいた問題に對し、それを再檢討し、發展せしめられたものであり、發表の當時、所謂歷史地理學的分野に於ける見るべき成果として、寧ろ地理學界を賑したものである。此方面に關する著書論文に普く引用され、近時の如く地理學に於ける歷史的方法を重んじ、新しき地理學理論の確立をこゝに求めんとする傾向あるに際しては、氏の學界に對する重大なる寄與の一として其價値の一段と著しきものがあると思はれる。殊に越中散居制の問題の如き實に再三に渡つて之を論ぜられ、氏の興味が如何に此種の問題に集注してゐるかを語つてゐる。其他、福井藩の割地問題、日野商人團の研究の如き、いづれも氏が一つの問題に對して一歩なりとも前進せられんとする努力を物語らぬものはない。

然も之等の諸論文がいづれも氏自身の採訪にかゝる新しき資料を主とし、手堅い手法によつて論述せられてゐる事は、前者と同じい。

卷頭には氏の若き頃の愛讀書「時代と農政」の著者、柳田國男氏に對する獻辭がついてゐる。之は「所謂本地屋根元史料について」の如く、柳田國男氏の論文と直接關係あるものがあるからばかり